

「ゴースト・トラベル」

—初稿—

2024/11/18

雨森 れに

〈人物表〉

寺沢 タエコ	(16)	フィリピンのハーフ。女子高生。
寺沢 マリエル	(33)	フィリピン人。スナックのママ。

〈ログライン〉

新しい人には気にかけてもらえないタエコが、拾った子犬が死んだことをきっかけに家を飛び出す。

〈ねらい〉

- ・テーマ触媒…本当に書きたいもの。
- ・吊いのシーンを書く。
- ・タイトルは気にかけてもらえないのを幽霊みたい、家出を旅としてつけてみました。
- ・補足 Aalis na ako. はタガログ語で「そろそろ行くね」⇒意識して「やようなら」にしました。

1. 寺沢家（深夜）

隙間風で窓がガタついている。

1Kの部屋はゴミだらけ。床には督促状や封書が未開封のまま放置されている。

夏の制服に男物のジャンパーを着た寺沢タエコ（16）。部屋の隅で膝を抱え、目の前の小さい段ボールを見つめている。段ボールの中にはマフラーとタオルが入っていて、微かに動いている。

タエコ、手を温めるように息を吐く。

2. 寺沢家（朝）

カーテンから透けた朝日。

段ボールを覗き込むタエコ。

タエコ「いってきません」

3. 商店街・スナック通り（朝）

商店街の最後尾あたり、スナックが多く並ぶ。スーツを着た通勤者が駅に向かって歩いている。

スナック『ベンジャミン』の前に回収を待つおしぼりの箱。扉に向かうように、箱に座るタエコ。

通勤者は通りがかるたびにタエコを見る。

視線に耐えられず、タエコは下を向く。

足元はボロボロのスニーカーにアンクル丈のソックス。つま先をすり合わせる。

『ベンジャミン』のドアが開き、スニーカーの目の前に赤いハイヒールが出てくる。

マリエルの声「大家サンは」

タエコの声「無理だつて」

マリエルの声「つかえないババア」

ハイヒールが歩き出す。ヒールの金属が出ている音がする。

タエコ、慌てて後を追う。

× × ×

通勤者と逆の流れで歩く寺沢マリエル（33）。暖かそうなコートを着ている。数歩後ろを歩くタエコ。マリエルがアイコスに煙草を差し込む。

タエコ「ママ、こんなところで吸っちゃダメだよ」

マリエルは無視して吸い始める。

タエコが路上喫煙防止の行政員を見つける。

タエコ「ね、怒られちゃ」

マリエル「（遮って）うるさいヨ！ 私はアンタの学費稼いでるんでしょガ！ 親に文句言うと天罰下るヨ！」

マリエル、煙草を抜いてタエコの顔に投げつける。顔を押しえて、地面に落ちた煙草を拾うタエコ。

マリエル「（タガログ語）タエコ」

T 「私の排泄物」

タエコが起き上がる前に、千円札が2枚投げつけられる。

マリエル「今日は帰らない。店にも来るナヨ」

通勤者と同じ方向に歩いていくマリエル。

お金を拾うタエコ。ヒールの音が遠ざかっていく。

4. パン屋・店内（朝）

商店街の中にあるパン屋。

湯気のがる焼き立てパン。それを窓際のトレーに並べる店員。

5. パン屋・外（朝）

タエコ、喉を鳴らして腹に手を当てる。

ドアベルの音。

店員 「あんた、ちよつと」

タエコ「あつ、ごめんなさい！」

タエコは逃げるように去る。

店員、ため息をついて店へ戻る。

6. 寺沢家（朝）

タエコ、レトルトパウチのドックフードを皿に出す。

段ボールのマフラーを除ける。内側にはタオルが敷いてあり、カイロが2つほど貼られている。水の入った皿の横に子犬が横たわっている。子犬は動かない。

タエコ「なんで」

子犬を抱き上げる。

タエコ「あつたかいのになんで」

タエコ、子犬をマフラーで包んで擦る。

子犬は息を吹き返さない。

それでもタエコは擦り続ける。

7. 寺沢家(昼)

携帯電話の音。着信は学校から。

子犬を抱いたままのタエコ、電話に出る。

タエコ「もしもし」

教師の声「おう、寺沢。もう昼だぞ。今日は来ないんか」

タエコ「先生、犬が……」

教師の声「あー。そうだ。飼える人いないか探してくれて言われてたの忘れてたわ。でもお前、だからって学校休むは違うだろ」

タエコは耳から電話を離す。

教師の声「おい。聞こえてるかー？」

タエコ、子犬を抱いたまま、外へ出ていく。

玄関ドアの音。

8. 商店街(昼)

店が開き、人通りが増えている。

タエコは子犬を抱えたままで走る。

商店街にいる人々はタエコに気付いても、ひそひそと話すだけで声をかけたりはしない。

× × ×

パン屋前。「食パン焼きたて」の看板を出す店員。

タエコが走ってくるのに気づく。

店員「あんた！ ちょっと待ちな！」

タエコ「(驚いて立ち止まる)え……」

店員、パン耳の入った袋を渡す。

店員「朝イチなら、いつもあるから」

タエコ、顔をくしゃくしゃにして、

タエコ「ありがとう……」

タエコが何かに気付いたように顔をあげる。

タエコ「明日返すんで、ライターとかありますか」

店員、困った顔をして店内へ行き、すぐ戻ってくる。

店員「立ちションの匂い消しだけど、これでいい?」

マツチ箱をタエコへ。

9. 駅前(昼)

商店街の始まりにある小さな駅。駅横の踏切を待つ

タエコ。息を切らしている。

踏切の向こう側、タクシーを止めるマリエル。身な

りのいい男と一緒にいる。

マリエルに気付くタエコ。

マリエルもまた、タエコに気付く。手でどこか行け

と合図し、タクシーに乗り込む。男にはタエコが見

たことないような優しい笑みを浮かべている。

タエコの手に力が入る。

踏切が開き、タエコはまた走り出す。タクシーに乗

ったマリエルとは顔を合わせない。

10. 河川敷(昼)

広めの川が流れる河川敷。人がまばらにいる。

タエコは橋の下の日が当たらない場所にうずくまっ

ている。

子供のボール遊びの音。母親を呼ぶ子供の声。犬の

吠える。

タエコが聞きたくないという表情で子犬を抱きしめ

る。

子供「おなか、いたい?」

ボールを持った子供が話しかける。

タエコ「(取り繕うような笑顔で) いたくないよ」

親 「あぁっもう！ すみません！」

子供が親に連れていかれる。

その様子をみながら、

タエコ「いたくない。いたくない……(子犬を見て) いたかった
？」

× × ×

夕暮れが水面に映り、輝いている。

すすけた一斗缶を、橋の下に運ぶ。

小枝や古い新聞紙が用意されていて、一斗缶の中に
詰めていく。

マフラーで包んだ子犬をその上へ。

マッチに火をつけ、一瞬眺め、一斗缶の中へ放る。

タエコは日が燃え上がる様子をじっと見つめる。

黒い煙が空へあがっていく。

小枝を足そうとした指先に、パン耳の袋が当たる。

乱暴に袋を開け、咀嚼する。

長らく食べていない喉にパンが通らず、口からこぼ
れる。

タエコ「う……うえ……」

パンを吐き出しながら、タエコの目から涙が溢れる。

次第に嗚咽になり、大声で泣く。

鳴き声が河川敷に響く。

× × ×

太陽が沈み、暗い河川敷(引きで)

一斗缶の炎が見える。

1. 寺沢家(朝)

布団の上に携帯電話と「Aalis na ako.」のメモ。

T 「きょうなら」

1.2. 商店街(朝)

新しいパン耳の袋を持ったタエコが、歩き出す。

おわり